

関係者に聞く

●上

委員会主催が20日から3日間、沖縄大学で開催される。関係者らは、子どもたちを支える仕組みづくりを自指し、記念講演やシンポジウム、分科会などの準備を進めている。同実行委員会の共同代表を務める梶子とも会育成連絡協議会会長・玉寄哲永さんら3人に沖繩の子ともたちをめぐる現状や同集会の意義などを紹介する。

「子育て」が「孤育て」に

「梶子とも会育成連絡協議会の会長を長年務めるなど、40年以上にわたって子ども向き合ってきた。沖繩の子ともたちの現状をどう見るか。」

「今の子ともは人間関係を自ら構築する姿勢が弱くなっていくという指摘があるが、それは違う。子どもたちは変わっていない。沖繩でも、昭和30年代」から『子育て』が、親が地域とのかかわりを持たずに孤立して

子どもを育てる『孤育て』に變化したように感じる。地域社会の在り方が貧しくなっている」

「2004年ごろまでは県内に478の子とも会があったが、08年には407まで減少した。自治会加入率も低くなり、子どもを支える仕組みが弱まっている。昨年のクリスマスに、ある子ども会が地域の家を一軒

ずつ訪ね、お菓子をもちょう代わり」に『あなたの家に幸せが訪れますように』と書いたフレードを贈るという取り組みをした。他地域から転居してきた若い夫婦がその光景を見て、『ここには地域のつながりがある』と感動し、近所付き合いができるようになったという。支える仕組みがあれば、子どもも大人も自発的に人間関係を築くことができよう」

「地域に求められていることは何か。」

「子どもは地域の一員と受け止め、地域の大人がどんな子どもでも支援してほしい。目玉焼きに例えるなら、地域がフライパンで自身が親、自身が子ども、フライパンが熱くないと自身も黄身もしっかり固まらない。地域が熱意を持って支援しないと、親も子どもも『自分』が固まらぬ」

―集会の意義は。

「16分科会では、乳幼児期の保育から子どもの食生活まで、子どもを取り巻く諸問題が網羅されている。昨年のうるま市の中2集団暴行死事件など、何か問題が起きた時に『子どもたちの問題を何とかしたい』と思う人は多いが、なかなか具体的な行動につながる。『誰かが解決するだろう』ではなく、みんなが当事者意識を持って子どもとかがわかることが重要。行動を始められるきっかけとなる集会にしたい」

玉寄 哲永 沖子連会長



子どもを取り巻く現状を語る玉寄哲永共同代表者（右）、那覇市組町会館

支える仕組みが大切

聞き手・銘切つばき

水曜日掲載